

## 危機にある村落田畑山海

「蝶の雑記帳 105」

9月19日の新聞に、「植物工場、人口増加対策の切り札」という大きな紙面を占める記事が掲載されていた。添えられた見出しに「高品質・コスト減、米国市場で拡大」とある。

「Sunday World Economy」欄のこの記事はその事象を肯定的に見ているのだ。しかしわたしは、岩波ブックレット『里山危機』（永幡嘉之著）を読んだばかりだったので、感心ばかりはしておれなかった。

雑誌『世界2月号』のグラビアに身がすくんだことを思い出す。そこには、米国の広大な草もない荒地に万で数えるほどの牛が囲われている写真があった。食肉工場に「出荷」される前に濃厚飼料で4か月太らされるのだという。もう一つの写真も米国で、とても大きなドーナツ状に身動きのとれないほど小さな囲いが並び、それぞれに搾乳機をつけられた乳牛が入っている。人工授精で生を受けた乳牛が全部で8万5千頭いるそうだ。生き物を手段とする工場である。22時間稼働して牛乳を搾取し、市場に出荷するという。先日、日本のニュースで鳥インフルエンザの流行をおさえるために500万羽の鶏を「殺処分」と聞いて、大変な世の中になったと思ったが、それは一例に過ぎなかった。グラビア冒頭の写真は、サウジアラビアでの作物栽培のようすを映したもので、今日の記事に添えられた「植物工場」の写真につながる。100近くの緑の円形の広がる写真は、最初見たとき、おもしろい幾

何学模様のように思った。だが、それが砂漠につくられた灌漑農地で、一つの円の直径が1 km、水は地下深くからくみ上げられ巨大スプリンクラーで散水する、と説明されてみれば見方は一変した。

突きつけられているのは、大きくは「人新生」と呼ばれるようになった今の世の重大な問題である。一月にグラビア写真を見た感慨を記録しておきたいと思って雑詠日記に記したが、今日はそれも含めて、農業さらに人間の生活全般にかかわる問題として改めて考えてみたい。と言っても、わたしにできる限られた範囲のことである。「人新生」という地質年代は、1950年代からの世界の高度経済成長によって加速し、21世紀になってみれば人の目にもとまるようになった。しかし、そうあってはいけないけれども、現に生活している者は地質に記録されるほど長期的な事象になかなか気づけないし、どのように対処すればよいかはさらに思いつけなくて、効果のある行動をとることができないでいる。

だが、それほど長期ではなく人間の一生程度の時間スケールに注目すれば、問題ははっきり見えてくる。実際、高度経済成長以来の農業をはじめとする産業構造の変化と、それに伴う生活の変化を、団塊の世代と呼ばれる年齢以上の人々はみな経験している。その体験に基づいて、今日考えてみようとしている問題の認識を深めることができる。そうすることは、その問題意識を団塊の世代よりも若い人々に広げること

に役立つだろう。じつは、『里山危機』の著者永幡嘉之さんは1973年生まれである。昆虫や草花などの動植物に関心をもつ人たちは、草原から野山に出て観察するうちにそこにいる生物にとって環境が生きにくい状態に変化していることに気づいている。そういうわけで、「里山」という言葉に代表される場所に問題が生じていることを認識している人たちがかなり前から増えつつある。

こちらの方から議論すれば、われわれは何に取り組みばよいか具体的に考えることができるだろう。ただ、里山は風景写真で紹介されることが多く、残念なことに、その美しさが里山の抱える問題を正確にとらえることを妨げがちである。わたしはこの思索で、「里山」よりも課題を明瞭に表現する言葉を使うことにしたい。それが表題に掲げた「村落・田畑・山海」である。もともと里山という言葉は、村落と田畑とそこを流れる川や周囲の山を表現していたはずである。そこに「海」を加えたのは、わたしが海辺に暮らしているからでもあるが、海という語を足せば、農業だけでなく漁業も含めて日本列島では欠くことのできない生業を考慮することになるからである。村落という言葉なら、たいてい半農半漁で「里」の側面をもっていた漁村まで含めることができる。語句を簡単にするために、山から出た川と水路は田畑に付帯する必須のものと考えて省略することにしよう。

「村落・田畑・山海」という語なら、古来日本社会の構成

単位であった村落共同体を表現することができる。三つの語をこの順番に並べたのは、まず人間とその生活が重要だと考えるからである。そしてこの語句で、「里山」が表現していた人間の活動が作りだした環境、すなわち、人家・田畑・山海の順にグラデーションのある人工化された自然環境を表わすこともできる。もちろん、それに応じて動植物の分布が変化していく生態系としてとらえることができる。言うまでもなく、たとえば生物学的な問題を考えるとき、山海・田畑・村落の順序でアプローチすることが必要で有効な場合があるだろう。

『里山危機』が提起しているのは、そういう「村落・田畑・山海」が後戻りできないような変化を続けているという問題である。その変化は、とりわけ第二次世界大戦後に加速した。ここには、経済、暮らしと文化、人間と生物にとっての環境などの問題がある。それは、世界の高度経済成長とそれが社会と環境に及ぼして生じている問題にほかならない。「里山」について議論されているのは、そういう現代社会に普遍的でぜひとも解決しなければならない問題である。先ほど「人新生」という言葉を出したが、その大きな問題に取り組む第一歩は、人間の生活に密着したところで始めるしかないだろう。そうすると、生活基盤の要素である「村落・田畑・山海」から成る村落共同体をなんとか維持する運動が欠かせない。

ブックレット『里山危機』は、里山の生態系の変化を、典型例の写真を添えて危機感をもって説いている。団塊の世代以上の人でいなか育ちの人ならだれでも、自分の体験に基づいて、今では見られなくなった動物や植物の名を挙げることができるだろう。半農半漁の村落で育ったわたしも挙げるができる。田畑のためのかなり大きな水路は水がきれいではなかったが手長エビがいて、ときにはアユの稚魚が上ろうとした。やがて下水道が整備されて、コンクリートで護岸された水路は透明度が増したが草や川藻もほとんど生えず、家にまで来るともあったオニヤンマやホタルは姿を消した。農薬のせいでもある。ここでは、里山とちがう内海の内海の変化をいくつか挙げておこう。家のうしろで小さいがクロダイ・メジナ・バリ・メゴチ・イイダコなどが釣れた。アサリ貝やツメタ貝など数種の貝類もとれた。しかし、わたしが都会に出たころ海岸道路が建設され、波消しのテトラポッドが置かれたせいで、今ではこれらの魚の姿を見かけない。テトラポッドには新来のワカメなどの海藻やカサゴなど二三種の魚がいるだけとなった。

子供のころ集落の防波堤には大小の漁船が 20 隻以上いたのではないかと思う。底引き船には何人も乗組員がいた。すぐ北には県下の日本海側では一番大きな漁港があった。しかし、魚群探知機などの機器が導入されて漁船も大型になったことで、魚を獲りすぎたことが第一の原因だと思われるが、外海の漁獲量はしだいに減り、内海の魚影もずいぶん減った。

近年、海水温度が上昇していることも打撃を与えている。今では、漁獲量がうんと減り漁業に従事している漁船はごく少数になった。係留されている船はもっとあるが、それらは遊漁船と言わなければならない。衰退が見えていたころ大きな魚市場が建設されたが、活気のなさをさらしているので、年に一度か二度イベントをして人集めをしている。

こう書いてくれば、経済成長とそれに伴う産業・生活基盤の整備が漁業（農業）の持続を助けなかったばかりでなく、生態系を破壊してきたことが確認できる。そして、それを生業としてきた人々の生活まで脅かすようになったことが分かる。それは、単に動植物の生態の危機ではなく、わたしの集落と北の町の共同体の危機である。町はさびれて空き家が増えつつある。共同体を守るためには、そこの生活者を守らなければならない。

「村落・田畑・山海」の危機は、日本の地方の共同体が櫛の歯が抜けていくように衰退する危機なのである。地方だけのことではない。今では、中級の都市でも少し郊外を車で走れば雑草の茂った耕作放棄地を目にする。それが日本の社会にとっての危機であることを知らなければならない。

今日の「植物工場」の記事には「担い手不足解決も」という小見出しがあったが、その問題はもっと複雑である。北浦と呼ばれるこのあたりでは、漁業に従事する家で跡継ぎがほかの仕事に就き、求人の多い都市に出ていくので漁業従事者

が減っている。農業でも同様である。もし、農業・漁業でそれなりの生活を維持できるのなら、これほど従事者が減ることはない。仕事が相対的にきつくても収入が家族を養うのに必要なほどあれば家のあとを継ぐ人はもっとあるにちがいない。大きな規模の「植物工場」をつくって担い手を減らす代わりに、農業や漁業やほかの業種の小規模でも多くの形態の営業ネットワークが形成できて支え合えれば、新しい村落共同体が維持できる、と思う。それは理想論にすぎないと言われるだろう。しかし実際に、昔の村落共同体は、かつかつかもしれないがそのようにして形成されたのだ。

現在、都市化が進んで人口の大部分が都市に住むようになってきているけれども、「村落・田畑・山海」は都市の人々にとっても必須のものである。それが存在することで、都市の共同体も維持できるのである。都市の人々もこのことに気づく必要がある。

問題をこのように社会の問題ととらえれば、この危機を打開するための政治と経済の問題でもあると考えなければならない。ブックレット『里山危機』はそのことにわずかに触れている。ヨーロッパでは国土利用の計画が現実にも働いているという。ところが、現状を見れば、日本に掛け声以上の有効な動きがあるとは言いがたい。事態は短い年月で解決できないだろうから、省庁で担当部署を設けて対策を検討し施行する人を置くべきである。マスコミももっとこの問題を取り

上げて、社会的な機運を盛り上げる必要がある。今日の新聞の記事は、農業の抱えている上のように広がりのある問題にあまりにも無頓着だ。もちろん、事態の打開を図るために、さまざまな試行をしなければならない。けれども、そのとき関連する全体を調整するのでなければ成功しない。地方共同体の人々の生活がなりたたなければ、日本の社会全体を維持することはできない。

文章をつくっていたら危機感がつのって、切迫した調子になってしまった。すでに身体も老いた者が気をもんでいる。

2021年10月重陽

海蝶 谷川修